

# 「庭上の一寒梅笑って風雪を侵して開く・・・」

～八重と新島襄（保阪正康著）を読んで～

社会福祉法人イエス団 神視保育園  
園長 牧田 稔  
1976年クリーブランド

2013年のNHK大河ドラマ「八重の桜」が始まりました。楽しみにしていた番組なので、事前に少しは新島八重について学んでおこうと、同志社出身のノンフィクション作家で評論家、菊池寛賞も受賞されている保阪正康著「八重と新島襄」（毎日新聞社 2012年11月発行）を、昨年12月初旬に購入し、一挙に読み終えました。

ほいくの窓2月号の表題は「庭上の一寒梅笑って風雪を侵して開く、争わず又力（つと）めず、自（おのず）から百花の魁を占（し）む」と、新島襄が詠んだ漢詩にしました。そこには、厳しい体験をした八重と襄と東日本大震災に被災した今日の福島をはじめ東北の人々に通じる漢詩のように思えたからです。「八重の桜」より、「八重の一寒梅」というテーマであってもよかったかも知れません。

このドラマのメッセージには、八重の生き方から、東北・福島に根づく不屈の精神、苦境に負けない生き方が、東日本大震災の復興を目指す被災地への力強いメッセージとなることを願って、会津若松出身の新島八重に白羽の矢が当たったと言われています。今回のドラマに先立ち、2009年にNHK歴史秘話ヒストリアという番組で「明治悪妻伝説初代ハンサム・ウーマン新島八重の生涯」が放映されました。

安中藩の藩士の息子の新島襄は、1864年に国禁を犯して脱国し、アーモスト大学やアンドーヴァー神学校で学び、日本でキリスト教精神に基づく人材養成の教育機関を創立したいと考えて帰国。しかし、京都で計画が知れ渡ると、僧侶たちが「ヤソ教の学校など許さない」と新政府や京都府知事に圧力をかけたりもした。八重の兄である山本覚馬は、幕末から明治にかけて自らの力で生きた異能な人物だったようで、1828年幕府の命よって京都守護職に就いた藩主松平容保（かたもり）に従い京都御所の守護にあたったが、その間、洋学所

を設け、英学や蘭学を教える場を作っています。やがて徳川幕府が破れ、徳川慶喜が大政奉還。

覚馬は、会津藩の何人かと朝敵として薩摩藩の屋敷へ幽閉された。しかし、そのような山本覚馬は、誰もが認める優秀な人物で、京都府の榎村正直知事の相談役となっていた。

山本覚馬と新島襄が知りあったのは、明治8年で、覚馬は新島襄のキリスト教主義学校設立に共感し、協力をしたといひます。同志社設立には、覚馬の政治力が大きかったといひます。

「同志社」の命名も山本覚馬であったという。

襄を知事に紹介したのは木戸孝允で、覚馬に紹介したのは勝海舟との説もあるようです。

一方、覚馬の妹八重は、1868年に戊辰戦争が勃発。会津藩主松平容保（かたもり）に従い、女性でありながら、鶴ヶ城に籠城して戦いました。戦死した弟の衣装を着て男装し、7連発のスペンサー銃と刀をもち、自らの信念に基づいて命を捨てる覚悟で果敢に官軍と戦った会津藩士の情熱、信念、そして、その行動の中に不屈の精神、苦境に負けない生きる姿がありました。

会津の少年白虎隊の指導もしたが、八重は鶴ヶ城に籠城し、圧倒的な物量で迫る新政府軍と戦い、これが「会津のジャンヌダルク」と言われた会津魂かもしれません。

その時、八重は24歳だったという。

1871年（明治4年）に兄覚馬のいる京都に移住。翌年には女紅場（によこうば）（女子に裁縫や読み書き等を教える学校）に勤め、京都府から給料をもらっている。当時では珍しい働く女性でした。1875年11月29日に同志社英語学校が開校（同志社創立記念日）。

1976年に八重はデイヴィスから京都におけるプロテスタント最初の洗礼を受ける。

翌日に新島襄と結婚式をデイヴィス邸で挙げる。

八重は女学校設立にも貢献し、同志社に京都看護

## MEMBERS' ACTIVITY REPORT

学校も設立。八重は裏が亡くなった年に日本赤十字社の正会員となり、社会奉仕に情熱を注ぎます。日清戦争のときは、ボランティア看護婦として40人の看護婦取締役として従軍。日露戦争でもボランティア看護婦として従軍し、後に日本のナイチンゲールとも言われたようです。八重は、激動の時代を会津武士の魂とキリスト教の精神で生き抜いた人生だったといわれる。封建的な厳しい時

代に、女性の自立した行動と働きの先駆者としての生き方は、厳しい風雪に耐えて咲く、庭上の一寒梅のように思われます。

この1年間、この大河ドラマと福島をはじめ東北地方の被災地の復興を期待しています。

(2013年2月1日、ほいくの窓 No. 131 より転載)

牧田稔さんは、阪神大震災で自宅が全壊し、大変厳しい状況の時に神戸 YMCA 副総主事という救援活動の責任者の一人として大きな働きをなさいました。YMCA を退職されたのち、社会福祉法人イエス団神視保育園園長として児童福祉に従事してきたことを大きな恵みであったと振り返っておられます。このたび同保育園機関誌「ほいくの窓」No.131、No.130 に寄せられた原稿をお許しを得てここに転載させていただきます。本年3月の退任を控え、今は超多忙な時期ですので時間的な余裕ができましたら改めて当紙にご寄稿をお願いしたいと思います。

「ほいくの窓」2月号、No.131 についてつぎのようなコメントを寄せられました。

「2月は、風雪を耐えて花を咲かせる寒梅に、福島復興への願いを重ねて、書きました。新島襄にあこがれ同志社で学ぶ機会が与えられ、今年のNHK大河ドラマ「八重と桜」を楽しみにしています。」

(浅野記)

## 「神は私たちの避けどころ、私たちの砦」

苦渋と欠乏の中で、貧しくさすらったときのことを決して忘れず、覚えているからこそ、わたしの魂は沈み込んでいても、再び心を励まし、なお待ち望む。(哀歌3章19~20節)

園長 牧田 稔

2013年の新年を迎え、豊かな恵みと平安がありますように、特に、2011年3月11日に起きた東日本大震災・津波・原発事故で被災された方々の上に、励ましと導きをお祈りします。

この予期せぬ悲惨な大震災・大津波の自然災害に加えて、人災の原発事故による不条理な出来事に、被災者一人一人は、どのように受けて留めているのだろうか。

生命や住居や財産等の喪失体験による悲嘆、絶望、怒り、自分だけが生き残った罪悪感、また苦渋の中で、仮設や遠方に転居し、何時になれば故郷に戻れるのか等の不安におののく被災者の心の叫びを教職者がどのようにとらえているのか、被災者の砦になったのかを顧みる必要を感じている。

教職者が人間の苦難や悲しみをどのようにとらえ、阪神大震災や東日本大震災で理不尽な苦しみを抱えて生きている被災者に、どんなメッセー

ジを語るのか、真剣に考え続け、慰めと励ましと希望を与えようとする姿勢のない教職者を、私は信頼することはできない。

教会では、このような災害で苦難の中にある時、ヨブ記がよく語られるが、実存的に生きていない人がヨブの生き方を語ると、かえって興ざめしてしまうのは、私一人でしょうか。

私の手元にある阪神大震災直後に賀来周一先生(牧師・元ルーテル学院大学教授・キリスト教カウンセリングセンター相談所長)が監修された「現代社会の悲しみといやし」(ルーテル神大教職神学セミナー講演録1995年10月収録)と「災害とこころのケア」(賀来周一・斎藤友紀雄監修2012年4月発行)、そして阪神大震災直後からの説教集「地の基震い動く時」～阪神淡路大震災と教会～岩井健作著(前神戸教会牧師・兵庫教区議長、学校法人頌栄保育学院前理事長、2005年9月発行)が、私の気になっていることに、真剣に

応えようとしている姿勢に敬意を表したい。  
ルーテル神大教職神学セミナー講演録「現代社会の悲しみといやし」は、阪神大震災で被災し、喪失体験をした私たちに、モーニング（嘆き、悼み）をグリーンワークとして取り上げ、不条理の視点から、信仰の在り方・スピリチュアルケアの在り方を真剣に問い続ける賀来周一先生の著書から、心に慰めと励ましをいただきました。この講演録を何冊か購入し、肉親を失った知人にプレゼントしたことを記憶しています。苦難のなかにあっても、慰めと励ましになればと思ったからである。

岩井先生の説教集「地の基震い動く時」は、「子どもの死の意味を考える」のプロローグから始まっています。最初に「子どもの死の意味を考える」としたことは、私にとって一挙に読み終えるきっかけとなった。（この書籍には、私が知っている方の名もあったかも知れないが・・・）読みながら涙を押さえることができない場面も多々あった。私は、阪神大震災直後に書いた子どもの作文に、どう答えたらいいのか今もわかりません。私たちの保育園のすぐ近くのM小学校の当時2年生の子どもが書いた「神様のいじわる」という作文です。

「神様のいじわる。何でえいじのいえつぶしたんや、えいじのいえつくれ、つくれへんのや

ったら

おかねくれ。おかねもくれへんねんやったら、こんなこわい地震するな。

おい神様、えいじの家さがせ。さがしてくれへんかったら、かみさまのいえもつぶしてやるからな。

おぼえとけ、おぼえとけ」という作文です。子どもたちが予期せぬ出来事に出合い、喪失体験をし、自分に「なんでやねん」と不条理を受け入れられない怒りや悲しみや不安等の混乱状況にある時に、心の中にある精一杯の気持ちを作文で表現しています。非日常的な災害だけでなく、子どもが厳しい現実の影響を受けて、何もできないでその現実を受けるとしか仕方がない子どもの叫びに耳を傾け、子どもの存在の意味を問い直し、咎となり、避けどころとなることが、大人の責任だと思います。子どもの不条理な死を愁い、「死の意味に対する宗教の在り方も問うたのが地震だった」と捉えた岩井先生の教職者としての姿勢に共感します。また、地震は、エーリッヒ・フロムの「もつ生き方 (to have)」から「ある生き方 (to be)」への価値観の転換の戦いであったと指摘していることにも共感を覚えます。

(2013年1月1日、ほいくの窓 N0130 より転載)

(神戸市在住)

## 2012 年度会費納入・寄付ご協力をお願い

2012 年度会費が未納の会員各位には納入をお願いします。また、平成 24 (2012) 年度事業会計収支予算に計上された一般寄付金へのご協力をお願いいたします。(年会費 3000 円、寄付金目標額 5 万円)

郵便振替 00270-4-54121 CIF ジャパン

または 三井住友銀行八王子支店(普)7815136 CIF ジャパン出納責任者梶村慎吾

### 本紙(ニューズレター No.29) 目次

2013 年頭所感・・・小池嘉夫氏・・・	p. 1
第 2 回 CIF ジャパン講演会 講演 1・・・	3
〃 講演 2・・・	5
〃 参加者からの質問と回答・・・	6
会員紹介 牧田稔氏・・・	8

[添付] World News Autumn 2012

特定非営利活動法人 CIF ジャパン

事務所住所 607-8216 京都市山科区勸衆寺東出町 75 番地

からしだね館 TEL:075-574-2800

<http://cif-japan.papnet.jp>

[cifjapan08@gmail.com](mailto:cifjapan08@gmail.com)